

# 東亜操觚者懇談会に関する考察

— 「満洲国」代表の視点から

大久保 明男

## 【要旨】

1940年2月11日、紀元二千六百年と喧伝された日本で様々な祝賀行事がおこなわれ、東京では内外のマスコミ関係者を招待し、「東亜操觚者懇談会」が開催された。会議には満洲国、汪精衛政権、東南アジアなどの外国代表と日本代表（外地の関東州、台湾、朝鮮を含む）が三百名以上参加し、近衛内閣が打ち出した「東亜新秩序」にマスコミとしていかに協力していくのかを議論することが趣旨であった。本稿は、かつて注目されてこなかったこの会議について、会議記録などの一次史料に依拠しながら、出席した満洲国代表の動向を中心に考察し、この時期のマスコミと文学界との関わりについて分析する。

## 【キーワード】

東亜操觚者懇談会 紀元二千六百年 吳瑛 疑遲 文話会

## 1.はじめに

1938年11月、日中戦争が泥沼化していく様相を呈するなかで、時の首相近衛文麿が、日満華三国の連携を軸とする「東亜新秩序建設」方針を打ち出した（第二次近衛声明）。水面下では、軍の特務機関員らが香港などで汪精衛派の幹部たちと秘密交渉し、国民政府の切り崩しを企て、いわゆる和平工作に奔走していた<sup>□</sup>。その功を奏して、12月、蒋介石から離反する決意を固めた汪

精衛ら一行は空路で重慶を脱出し、昆明を経てベトナムのハノイにたどり着いた。この動きを受けて、近衛首相がすかさず「善隣友好、共同防共、経済提携」の三原則（第三次近衛声明）を発表すると、汪精衛側がハノイで「和平反共救国声明」を出して呼応する。こうして、1940年3月の「南京遷都」、汪精衛を首班とするもうひとつの中華民国政府が成立するまでの間、日中間で対立、和平、抗争、分裂の動きがめまぐるしくつづいた。さらに、日中間に止まらず、ノモンハン事件、独ソ不可侵条約締結、そして第二次世界大戦勃発など、日中を取り巻く世界情勢も「複雑怪奇」の様相を呈していた。

このような情勢のなかで、各国では軍事力とともに重要視されたのは、情報戦、思想戦の利器となるマスメディアの力である。情報を伝達し、世論を左右するマスメディアは、権力者にとって利用できる武器であると同時に警戒すべき脅威でもあった。そのため、マスメディアに対する権力側の抑圧や干渉が激しく、他方、マスメディア側には権力者と結託して事業を広げたい思惑もあった。こうしたメディアと権力をめぐる緊密・緊張関係のなかで、1940年2月11日、「皇紀二千六百年」とされる日の東京で、内外のマスコミ関係者を集めて、東亜操觚者懇談会<sup>そうこ</sup>という一大イベントが開かれた<sup>[2]</sup>。日満華（汪精衛政権）三カ国代表が参加者の主体をなしていたが、日本の植民地となった台湾、朝鮮半島、関東州から、さらにハワイ、ロサンゼルス、シンガポール、タイなどの地域からも代表が参加し、総勢 300 人以上におよぶ大規模な国際会議となった。興味深いことに、満洲国代表のなかに呉瑛、疑遲など数人の文学者がいた。彼らは新聞や雑誌の記者、編集者を本業とするかたわら文学活動に携わっていたからだ。ところで、管見の限りではこれまでの先行研究にこの会議及び会議に参加した文学者に関する論考がほとんど存在しない<sup>[3]</sup>。そのため、本論はまず会議の概況を整理した上で、参加した満洲国代表の動向を考察しつつ、この会議が満洲国の文学界および日満の文学交渉にどのような影響を及ぼしたかについて初歩的な探求と分析を試みたい。

## 2.東亜操觚者懇談会の概要

### 2.1.開催経緯

筆者は先に、当懇談会の開催にあわせて満洲国政府より派遣された古丁、小松、山田清三郎ら作家訪日団のことを考察したが、資料収集の過程で、当懇談会の様子を記録した公的資料「東亜操觚者懇談会誌」を入手できた<sup>[4]</sup>。以下は主に当「会誌」および満洲国で発行された政府機関紙『大同報』の報道記事などに基づき整理し、会議の全容をあきらかにしていく。

会議の正式名称は、紀元二千六百年記念 東亜操觚者懇談会。主催者は東京市。会期は2月11日より4日間。主催側の日本からは120名ほど（日本内地のほか、朝鮮、台湾、関東州、南洋など含む）、満洲国から30名、中華民国48名（華北22、華中12、華南11、蒙疆政権3名）、タイ5名、ほか11名（ホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、サクラメント、ペルー、シンガポール）、総計300名以上の新聞、雑誌、通信社の代表らが参列した。

これまで、たとえば1937年11月、満洲国政府弘報処派遣の訪日記者団の来日（文芸誌『明明』の代表として小松が参加し、東京、箱根、熱海、伊勢、奈良などを遊覧した<sup>[5]</sup>）などはあったが、複数の国や地域からメディア関係者が一堂に集まるような大規模集会はこの会議がおそらく初めてであろう。

会議開催に至る経緯、殊に日本政府ではなく、東京市が主催者となった理由や背景についていまのところ詳らかでない。推測に止まるが、「皇紀二千六百年」という節目の年にあたり、様々な祝賀行事を計画していた東京市にとって<sup>[6]</sup>、「近衛声明」に触発され、内外のマスメディア関係者に白羽の矢を立てたのではないかと考えられる。「近衛声明」では、「この新秩序の建設は日満支三国連携へ、政治、経済、文化等各般に亘り互助連環の関係を樹立するを以て根幹とし、東亜に於ける国際正義の確立、共同防共の達成、新文化の創造、経済結合の実現を期するにあり」<sup>[7]</sup>とうたっている。東京市はこの「文化」のキー

ワードに着目したのではないと思われる。実際、「近衛声明」の発表を契機に、「文化建設」「文化創造」などの言葉が頻繁にメディアに登場し、日満支三地域を中心とする「東亜文化建設」が「東亜新秩序」を支える重要な国家戦略として位置づけられていた<sup>[8]</sup>。

また、戦線とともに拡大した大陸占領地において、現地軍の指示により治安維持や宣撫工作の重要政策として新聞統合などマスメディアに対する整理整頓が進められてきた。それが一段落したところで、本土、外地、満洲国、占領地傀儡政権など各地のマスコミ関係者の意思疎通を図るとともに、「紀元二千六百年」を契機に、帝都ならびに帝国の偉容を内外、殊に海外の報道関係者にアピールし、もって現地でのプロパガンダ工作をよりいっそう円滑に推進したいという軍の意図に、東京市が協力させられた面もあったかもしれない。

一方、「会誌」に記載された開催までの経過はおおよそ以下のとおりである。

1939年12月21日、会議開催計画並び予算案が市会で議決され、この日より具体的な準備作業に入った。年末にもかかわらず、東京市の関係者らは連日、日本新聞協会、日本雑誌協会、東京商工会議所などの関係者を召集したり、政府、各関連機関と打合せをしたり、精力的に動いた。こうして、歳末の12月28日に実施案および会議要綱が決定され、翌1940年早々、海外参加者の斡旋機関に依頼状、招待状を寄託したという。依頼先は、対満事務局（満洲国、関東州）、興亜院（中華民国）、陸軍省（広東）、海軍省（海南島）、外務省（タイ、南洋諸島）、拓務省（朝鮮、台湾、樺太）となる。一方で、1月26日、国内参加者への招請状が発出された。送り先は、新聞関係80名、雑誌関係20名で、新聞は、内地：北海道4社、東京20社、大阪3社、ほか京都、名古屋、新潟、静岡、岐阜、石川、高知、福岡、大分、熊本、鹿児島各府県に各2社、その他の各県は1社、各社より1名。外地：朝鮮5社、台湾3社、関東州2社、南洋1社、となっている。

1940年2月3日、参加地域との調整を終えた主催側が協議会を開き、各地域の参加者および会議日程を公表する運びとなった。

## 2.2.各地の参加者

満洲国の参加者は30名であるが、日本皇紀二千六百年満洲帝国慶祝委員会が弘報処と協議した結果、2月1日、協和会で会議を開き、参加者人選を公表した<sup>[9]</sup>。詳細は以下。

団長：姚任（弘報協会）、副団長：笠神志都延（満新）、事務長：都丸伊勢松（弘報協会）、団員：前田義孝（国通）、王桐文（国通）、福田政蔵（満日）、望月百合子（満新）、孫恵卿（大同報）、董步蟾（大同報）、B・I・リヤーツェンツェフ（ハルピンスコエ・ウレミヤ社）、井上宗之進（マンチュリア・デーリーニュース）、洪陽明（満鮮日報）、吉田亮之助（安東新聞）、浦瀬太郎（哈日）、侯立常（泰東日報）、譚世傑（大北新報）、八木市松（東満新聞）、于蓮客（盛京時報）、張步鬢（三江報）、窪田利平（撫順新報）、小濱新（奉天毎日）、城島舟禮（新日、月刊満洲）、小山貞知（満洲評論）、塔勤（蒙古新聞）、張幼岐（醒時報）、耿立德（農業進歩社）、呉玉瑛（斯民）、劉煥彦（商工月刊）、劉玉璋（藝文志）、王光烈（新満洲）、堀勇雄（慶祝委員会事務局）。

慶祝委員会は全満各地の新聞社、雑誌社に目配りし、「五族」から代表を精選したことがリストから窺える。このうち、下線の三名は女性の参加者である。後述するように、他地域からの参加者はほぼ全員男性だったから、女性三名の存在が日本各地で注目を浴びた。波線のところは、実際の参加者が王光逖、何保信、鄭紹武に差し替えられた。また、小山貞知（満洲評論）が実際参加しなかったことも「会誌」の記録より判明した。一連の参加者交替と欠席の理由についてなお調査する必要がある。一方、メディア関係者でありながら、文学創作活動にも携わるのは、姚任、望月百合子、于蓮客、城島舟禮、呉玉瑛（呉瑛）、劉玉璋（疑遲）、王光烈らである。

中華民国（汪精衛政権）の参加者は48名、内訳は以下。

蒙疆3：宮崎正二（蒙疆新聞社・華文部長）、鄭寿亟（同・整理主任）、夏鉄漢（蒙疆日報）。華北22：李春鷹（武徳報）、青山二郎（華北連絡部政務局）

ほか。華中 12：団長・鐘任寿（維新政府行政院宣伝局秘書）、副団長・高亜文（中華聯合通訊社蘇州）、幹事・李光源（中華聯合通訊社武漢總社）、何士元（南京新報）、何治平（杭州新報）、章建之（中華日報）ほか。華南 11：楊東泰（海南訊報）、澤重信（全閩日報）、井上正男（広東共栄会）、阮振文（華南新報）ほか。

その他の地域は以下の 11 名。

ホノルル：山下草園（日布時事・東京支社）、牧野勲（布哇報知。なお布哇はハワイのこと）。香港：衛藤敏彦（香港日報）。新嘉坡（シンガポール）：長尾正平（新嘉坡日報）、志賀四郎（南洋日日新聞）。桑港（サンフランシスコ）：鷺谷精一（日米社・東京支社）、小澤武雄（日本トアメリカ）、鈴木亀之輔（新世界朝日新聞）。ロスアンゼルス：武藤省吾（羅府新報）。サクラメント：竹田文治郎（櫻府日報）。ペルー：鈴木喜一（リマ日報）。

さらに日本代表の枠に組み込まれた外地代表は以下のとおり。

朝鮮：熊谷寛一（京城日報社・東京支社）、李允鐘（毎日新報）、野崎真三（朝鮮日報）、松波千海（全北日報）、河井戸四雄（朝鮮民報）、里吉府芳（朝鮮公論）。

台湾：永井省三（台湾日日新報）、徳富迪（台湾新聞）、松野勝義（台湾日報）ほか。

関東州：由比濱権平（満洲タイムス）、西川國一（新東亜社）。南洋：山本耕三（南洋新報）。

日本内地の代表は総計 108 名。

古野伊之助（同盟通信社長）、清浦奎吾（日本新聞協会・会長）、野間左衛（日本雑誌協会・会長）、森一兵（名古屋新聞社長）、田中秋声（旭川新聞社長）、種子田宰（鹿児島朝日社）。ほか、講談社、主婦の友、文藝春秋、中央公論、改造社、日本評論社、実業之日本社、博文館、新潮社、誠文堂新光社、東洋経済新報社、第一書房、第一公論、婦人之友、解剖時代社、育成社弘道閣、婦女界、料理の友、の関係者となっている。

### 2.3.会議の日程と内容

ここからは満洲国代表の行動を主軸に会議の中味について見ていく。

2月1日に慶祝委員会が参加代表を公表したが、2月5日午前10時に代表らが満洲弘報協会に集められ、結団式がおこなわれた。席上、弘報協会庶務課長・実性が経過報告、弘報協会理事長・森田があいさつ、弘報処長・武藤富男が訓示（集合時間厳守など団体行動の諸注意）、協和会輔導部長・恒吉秀雄が訓示をおこなった。最後は姚任団長のあいさつで締めくくった。

結団式のあと、新京神社参拝。正午に中央飯店で協和会中央本部主催の招待宴に出席、同午後2時、再び弘報協会で打合せ。先遣隊3名は同日夜発「のぞみ」（釜山—新京間の急行列車）で出発、本隊28人は6日午前8時、「ひかり」に乗車し、朝鮮経由で日本を目指した。

同日夜、列車は安東（丹東）を通過し、朝鮮半島に入った。ここで、やはり準備が慌ただしかったせいか、寝台券が足りないトラブルが発生した。二十数名の団員に対して寝台券はわずかしか用意されていなかったのだ。協議の結果、日露鮮蒙各民族に一枚。満系は高齢の王希哲（王光烈）と女性団員の孫恵卿、呉瑛にも各一枚、残り2枚はくじ引きとなった。寝台があてがわれず、車体の揺れが激しく原稿が書けないと嘆かれるなど、釜山まで約28時間の車内は快適ではなかったようだ。<sup>[10]</sup>

7日、正午に釜山到着、すかさず関釜連絡船「徳寿丸」に乗船、日本に向かう。夜7時半に下関到着。満系一行は船旅初めての人が多く、ほとんど船酔いに苦しめられたという。しかも、この日は旧暦の大晦日で、普段なら家族団欒で過ごすはずだった。

団員たちは下関で一息つく間もなく、ただちに特急列車「富士」に載せられて東京へ向かった。今度は約18時間かけて、8日午後3時半ようやく目的地、東京駅に到着した。駅で華中、華南、蒙疆の代表らと合流し、数百名の出迎え者に揉まれながら宿泊先へ。移動中の二重橋前で一旦下車、宮城に向

けて拜礼。満洲代表の宿泊先は神田橋神昌館、華中代表は第一ホテルをあてがわれた。当夜 6 時、赤坂幸楽にて満洲弘報協会東京支部の招宴に出席、9 時に解散、三日間の強行軍はここでようやく旅装を解くこととなった。

9 日、各地代表が東京市、同盟通信社、朝日新聞、東京日日新聞などを表敬訪問。

10 日、午後に電報通信社にて各地代表団幹事会議を開催、大会日程などを審議・確認、座長、分科会司会者などを選出した。

11 日、会議初日。午前 9 時半に各地代表がそれぞれの宿泊先から二重橋前に集合、宮城奉拝をおこなう。つづいて明治神宮と靖国神社を参拝、昼に会場となる東京会館に集合、四階の大食堂にて東京市長の招待午餐会。

午後 1 時半から三階大広間にて開会式がおこなわれた。谷川・東京市記念事業部長が開会の辞、頼木東京市長代理で大久保助役が歓迎の辞、桑原・市会副議長があいさつした。

祝辞：有田八郎・外務大臣、児玉秀雄・内務大臣、畑俊六・対満事務局総裁、柳川平助・興亜院総務長官、阮振鐸・駐日満洲国大使、岡田周造・東京府知事、清浦奎吾・日本新聞協会長、野間左衛・日本雑誌協会長。

参加代表あいさつ：日本・森一兵、満洲・姚任、民国・鐘任寿。

祝電披露（林柏生、張景恵ら）。2 時半に閉会。

休憩を挟んで、午後 3 時 20 分から特別講演会。法学博士・下村宏「同文の得失」。評論家・室伏高信「現在の日本と東亜新秩序」。下村は、日中両国で使われる漢字の読み方が多種多様で、混乱が生じている。東亜の交流が盛んになっているいま、意思疎通を図るために、漢字の発音表記を日本のカタカナに統一する作業を、いま自らが関わっている国語審議会や国語協会、カナモジカイなどで進めていることを紹介した。室伏は、「東亜新秩序」の概念や真意が日中双方で必ずしも理解されていない現状を指摘し、「新」に対する「旧」とは、東洋を支配していた西洋的、帝国主義的なものと指摘。英国帝国主義



の打倒が東亜新秩序建設の第一歩であるが、日本が英国の二の舞になってはならない。「新秩序建設は単に言葉や儀式虚偽を以て解決し得るものではない」。指導者も民衆も楽観的で、理性に欠ける向きがある。だからこそジャーナリストの使命が重要。新秩序建設の原動力は政府にも軍部にもなく、「明日を考える」ジャーナリストにある、と論じた。

夕方、東京会館・四階大広間にて、東京市長主催の招宴。四百余名出席。夜八時散会。

12日、会議二日目。午前9時、参加者代表が永田町の内閣総理大臣官邸を表敬訪問、一ヶ月前に就任したばかりの米内首相と会見。10時20分、東京会館に戻り、ここからは操觚者懇談会総会が開会。まずは大久保東京市助役が市長代理あいさつ。つづいて、同盟通信社長・古野伊之助<sup>[1]</sup>が座長に着き、あいさつ。谷川東京市記念事業部長が懇談会テーマに関する説明をおこなった。当懇談会の趣旨でもあるが、議題は以下二つであった。

1.東亜新秩序建設への協力方策、2.日満華操觚者の連携強化。

そこで、旭川新聞社長の田中秋声が、まもなく誕生する汪兆銘新政権に激励打電の緊急動議を提出し、満場一致で採択された。

つづいて、満洲国を代表して笠神副団長が登壇、満洲国新聞の役割——宣徳達情、国策援助、民衆指導と説明し、日本マスコミ界との協力促進を提唱した。次に、維新政府行政院宣伝局秘書・鐘任寿が「中国の現状と東亜新秩序建設に就て」を題にスピーチ。日本における中国認識の遅れ、硬直化を指摘批判し、「正確な」中国認識を求めた。中国公論社・胡漢翔が、「興亜の聖業」に殉職した英霊に黙祷を献げる提議をし、この黙祷をもって午前の部が終了した。

正午は赤坂幸楽にて日本電報通信社の招宴。席上、光永社長があいさつ。

午後2時より懇談会再開。新聞と雑誌の二分科会に別れて代表発言・討論がおこなわれた。新聞部会では以下の提案が可決された。

中華民国代表提案：①操觚者懇談会の機関設置、毎年開催の恒例化。②東亜

新聞連盟の結成要望。①については大会役員を委員とする機関の設置。次回は南京で開催することを決議した。②は多くの関連機関と調整が必要のため、特別委員会に付議して継続審議となった。

つづいて満洲国代表の提議：①満洲国建国十周年にあわせて新京大会招請の件。②日華操觚者満洲視察招請の件。

その後、海南島、香港、蒙疆、厦門、鹿児島の各地代表が当地の新聞事情を説明報告した。

一方、雑誌部会では講談社・淵田忠良を座長に、第一公論社・上村哲彌、育成社・服部英俊、広東共栄会・井上正男、中国公論社・胡漢翔、日本雑誌協会・奈良静馬、第一書房・春山行夫、婦女社・都河龍、商工研究社・劉煥彦らが新東亜建設の邁進に関する状況報告・意見開陳・情報交換をおこなった。

夜は帝国ホテルにて、興亜院総裁と対満事務局総裁共催の晩餐会。21 時頃に散会した。

13 日、会議三日目。9 時半に東京会館・三階大広間にて、懇談会総会が再開。森一兵が座長・司会。懇談会委員長尾坂より汪精衛政権への激励電報について説明。中華日報代表が汪精衛の代わりに謝辞を述べた。つづいて、入院中の頼木東京市長への慰問団派遣を決議。新聞連盟結成の協議結果報告（準備委員会の発足）、次回会議開催場所の協議結果報告、蒙疆代表鄭寿畝、青島代表姚作賓の報告。日本国内代表の質疑応答（東京の有力新聞紙が熱心に報道しないことに対する不満が噴出）。東亜体育大会理事長の報告（6 月 6 日より 9 日まで東京明治神宮外苑で東亜体育大会開催の予告）。

つづいて閉会式がおこなわれ、東京市助役、市会議長、古野伊之助、姚任、姚作賓ら各国代表があいさつ。万歳三唱、記念撮影。バスに分乗して内閣総理官邸へ移動。正午、首相官邸にて、横溝内閣情報部長の招宴。

午後は二班に分かれて、東京朝日、報知新聞、東京日日、読売の四大新聞社見学。

終了後、大日本雄弁会講談社に集合。武道の実演を見学。一部の代表が華族会館にて、首相を退いて間もない近衛文麿と会見した。

当夜 6 時、東京会館にて、東亜経済懇談会長の招宴。一方、同時間に日比谷公会堂にて、一部外地代表の特別講演会がおこなわれた。大同報記者・董步蟾が「満洲治安とノモンハン事件」について講演<sup>[12]</sup>、ほか、蒙疆新報・鄭寿亟、厦門華南新報社・阮振文、天津婦女新報・黄勤、中華日報社・章建之（章克標）、新東亜・鐘任寿ら各地域代表がスピーチ、日本に対する要望や「新東亜建設」に同調する姿勢や熱意を語った。

会議終了後に日本舞踊（花柳寿美）と映画（「鶯」）鑑賞の余興があり、終了は夜 10 時を過ぎていた。

他方、当夜 8 時、東京会館にて、日本雑誌協会が満洲国の女性代表呉瑛と孫恵卿を迎えて座談会を開いた。雑誌協会側の出席は会長・奈良静馬、吉田俊作、渡邊康平ら（協会、主婦の友社、婦人之友社など関係者）。話題は婦人問題、満華婦人の家庭生活、結婚の儀式、銃後の活躍、子ども、皇室に対する信頼、事変および新政府に対する感想、ソ連に対する感想、日本婦人の印象、日本女性へのメッセージなど多岐にわたり、こちらも深夜までつづいた。

14 日四日目以後は、視察・見学・観光の行事がつづいた。

14 日は 9 時集合、ホテルから観光バス九台に分乗して出発。東京市の案内で市内を視察。まわったのは東京卸売市場（京橋、市場屋上から東京港観覧）、帝国議事堂、永田町小学校など。

正午は目黒の雅叙園にて、外務大臣の午餐招宴。

午後は同盟通信社（銀座）、第一生命保険相互会社、王子製紙十条工場を見学・訪問、講道館で柔道実演を観覧した。

夕方、東宝劇場で日本新聞協会、雑誌協会共催の招待観劇会が催された。

15 日（5 日目）は自由行動だったが、満洲国代表団の提案で、外地代表百名あまりが午前九時に皇居二重橋前に集合、日満支三国の連携と勤労奉仕精神

をアピールするために、造営中の聖壇盛り土作業に参加した。代表らは近くの宿泊先から徒歩で参加し、自主的に宮城奉拝したのちに作業に取りかかった。協和服礼装を身にまとった満洲代表一行は整然と作業をこなし、一般参拝者を感激させたという。谷川・東京市記念事業部長が代表団の団長および最高齢の王光烈氏 (60 歳) に対して感謝の意を伝えた<sup>[13]</sup>。ちなみに、この聖壇は同年五月に予定されている溥儀の第二回訪日に備え、観覧台として造成されたものだという。

16 日 (6 日目)、代表らが午前 9 時半に東京を出発、国際観光局のバスで横浜へ向かう。11 時、川崎到着。船に乗り換え、12 時半に横浜港着。市内見学。グランドホテルにて、横浜市、横浜商工会議所主催の招宴。その後、バスで箱根へ移動。車内観光しながら富士屋ホテルへ。夜は同ホテルにて、国際観光局の招宴。

17 日 (7 日目)、9 時、集合写真撮影。雪中、観光局のバスで出発。芦ノ湖を通過して沼津へ向かう。12 時 48 分、沼津発大阪行きの急行に乗車、17 時 10 分、名古屋駅に到着。駅貴賓室で休憩したあと、蒙疆、華北代表は萬平旅館、華南は名古屋ホテル、満洲代表は観光ホテルにそれぞれチェックイン。夜 7 時、名古屋公会堂で、名古屋市役所、名古屋商工会議所共催の歓迎会に出席。名古屋市長、愛知県知事、名古屋新聞社などの関係者も参列。9 時解散。

18 日 (8 日目)、9 時、各地代表らはバスに分乗して出発。市役所、商工会議所、名古屋新聞、愛知新聞社などを表敬訪問。名古屋城、東山動物園を見学遊覧。正午に向陽館で愛知新聞、名古屋新聞共催の歓迎午餐会及び懇談会に出席。14:25、名古屋駅から京都へ向かう。18:10、京都駅に到着。夜は宿泊の都ホテルにて、京都府、京都市、商工会議所共催の招宴。

19 日 (9 日目)、京都市内観光。午前西本願寺、東本願寺を見学。桃山御陵 (明治天皇陵)、乃木神社、伊勢神宮 (日向大神宮) を参拝。正午は四条八尾政 (現・東華菜館) にて、京都日日新聞、京都日出新聞共催の招宴。午後は京都府、市商工会議所を訪問。武徳殿で武道実演を見学。織物工場視察。

20日（10日目）、9：00 京都から奈良へ移動。9：47 奈良到着。市役所を訪問。奈良公園、春日神社、東大寺を見学。12：00 奈良ホテルにて、奈良市長の招宴。午後2時、代表ら一行44名、橿原神宮を参拝。3：45 橿原駅から大軌急行電車で大阪へ。車中で東京市長・頼木氏死去の知らせを受け、弔電出すことを決議。4：16 大軌上六駅に到着。大阪市および各新聞社の歓迎を受け、新大阪ホテルへ。18：30 同ホテルにて、大阪府、市、商工会議所主催の歓迎晩餐会。

一方、華中代表団10名はこの日午後に長崎駅に到着。夕方、長崎県、市、商工会議所主催の歓迎会に出席。21日に日華連絡船で帰途に就いた。

21日（11日目）、9：00、満洲、華北、華南、蒙疆各地の正副代表が二班に分かれ、大阪市の関連機関を表敬訪問。一班は市商工会議所、毎日新聞社、時事新報社、市役所。二班は大阪府庁、中部防衛司令部、朝日新聞社を訪れた。

一般団員は9：30に旅館を出発、鐘紡淀川工場を視察。正午に新大阪ホテルで、大阪朝日（大朝）、大阪毎日（大毎）、大阪時事新報共催の午餐会。下田大毎社長らがあいさつ。午後は二班に分かれて、満洲は大朝、華北、蒙疆は大毎両社をそれぞれ訪問・見学した。15：50、阪急電車で大阪から神戸へ移動。16：20 神戸に到着。新聞関係者が出迎え。観光局の大型バスでオリエンタルホテルへ。18：00、同ホテル四階にて、兵庫県、神戸市、商工会議所、観光局共催の歓迎宴。21：00 散会。

22日（12日目）、10：00、満洲代表一行26名が神戸港を視察。港内をめぐるフェリーに乗船。正午、東亜楼にて、市役所、神戸新聞共催の送別会。ここで訪日団の解散式がおこなわれた。席上、東京市代表あいさつ、満洲団長の答礼、団員別のあいさつがつづいた。午後、湊川神社参拝、市内見学。華北、華中、蒙疆各代表団は神戸で現地解散。19：00、菊水楼にて、訪日団側主催の慰労宴会。東京市七名の随員係員をねぎらった。

23日（13日目）、10：30、満洲代表は神戸を出発、列車で下関へ向かう。19：35 下関到着。市商工会議所より果物贈呈。山陽旅館で休憩。正副団長が

談話発表。団員らは乗船まで市内観光。22:30、関釜連絡船・金剛丸に乗船、日本を離れる。

24日(14日目)、6時、釜山に上陸。7:50、釜山—新京直通「のぞみ号」に乗車。深夜に安東を通過、満洲国領内に入る。

25日(15日目)、7:05、奉天駅に到着。南満地域の団員が降車。11:42、北満の代表らが新京に帰着。正副団長が車中で感謝の意や訪日の成果に関する談話を発表。

### 3.東亜操觚者懇談会の意義

懇談会の概要について以上見てきたが、この会が日満の文学界及び双方の交流にどのように関わり、いかなる影響を及ぼしたのか、以下、双方の動向をたどりながら検討していきたい。<sup>[14]</sup>

蘆溝橋事件四日後の1937年7月11日、日本政府は一連の軍事衝突を「北支事変」と呼び、華北への出兵声明を発した。同日に近衛文麿首相は新聞通信各社代表約40名を招集し、拳国体制確立のために協力を要請。さらに13日、日本政府は中央公論、改造、日本評論、文藝春秋、当時の四大総合雑誌の代表を集め、政府への協力を要請した。これを受けて、各新聞・雑誌社は文学者の現地派遣を検討しはじめた。そのなかでいち早く現地に乗り込んだのは、8月2日に大阪毎日新聞・東京日日新聞の特派員として空路で天津に到着した「大衆文壇の巨匠」吉川英治であった。その後、木村毅、吉屋信子、林房雄、尾崎士郎などが現地特派員として陸続と戦地に派遣され、新聞・雑誌記者による戦地報道とひと味異なる、文学者たちの手による報告文学なる戦争報道ジャンルが確立されていく。

こうして、戦争を遂行する日本政府と軍が言論・出版・報道に介入する一方で、メディア・言論・文学界側にも国家権力を利用して自らの利益拡大を図ろうとした思惑があり、両者の共謀関係が戦争の長期化に伴い次第に深まって

いく。1938年8月、武漢作戦に伴い、内閣情報部が文学者22名を組織して、「従軍ペン部隊」として現地に派遣することを決定。翌月、陸軍班14名（久米正雄・瀧井孝作・片岡鉄兵・岸田国土・佐藤惣之助・白井喬二・川口松太郎・尾崎士郎・丹羽文雄・浅野晃・中谷孝雄・深田久弥・富澤有為男・林芙美子）、海軍班8名（菊池寛・佐藤春夫・杉山平助・小島政二郎・吉川英治・北村小松・浜本浩・吉屋信子）が10月までに現地に派遣された。さらに11月、海軍が「南支派遣従軍ペン部隊」として中村武羅夫ら作家15名を選定し、広東の戦地に派遣した。

戦地に赴いた作家たちは、現地での見聞とともに日本が推し進める軍事行動の意義を敷衍するなど、おびただしい言説を新聞、雑誌に載せ、戦争の行方に高い関心を持つ読者に届けた。また、『中央公論』三月号に掲載予定だった石川達三の「生きてゐる兵隊」が内務省から発禁処分を受けたことや、同年9月に改造社より刊行された火野葦平の『麦と兵隊』が爆発的なヒットになるなど、戦地文学をめぐる話題がつづき、それに関わった作家たちもかつてないほど注目の的となった。

こうした戦争報道に深く関わるようになった文学者たちの行為について、松本和也は「総じて、従軍ペン部隊言説は、戦時下における文学者の位置・役割をクリアにし、再定位することになった。それは、職能を生かして、従軍一観察一報告というかたちで戦争一戦場を国民に媒介することで、国家からその社会的有用性を承認されるという構図である」と分析している<sup>[15]</sup>。戦地に赴いた少なからぬ従軍作家たちはこうした使命感を自覚し、ある種の昂揚感をもって自らの責務をはたそうとしたのだろう。

また、政府や軍にとって、文学者たちの担うべき役割について、五味淵は次のように述べる。「彼らに求められたのは、前線と銃後との物理的な距離を心理的な距離としないための言葉であり、現地軍の多面的な活動をく顔が見えるものにし、銃後の読者に理解させることだった。言い換えれば、帝国の版図を超えていびつに膨張してしまった日本社会を、前線、ロジスティクス、銃

後の三者を包含するかたちで、切れ目なく再統合する物語なりキャラクターなりキーワードなりを生産することが期待されていたのだ。」<sup>[16]</sup>

ところで、冒頭で述べたように、1939 年に入っていくあたりで、日中戦争の長期化や、汪精衛一派が国民政府から離脱して新政権樹立を模索する動きが現れると、メディアや文学者側は戦地報道に止まらない、さらに新しい役割を求められるようになっていく。すなわち、「第二次近衛声明」が打ち出した、日満華三国の連携をうたった「東亜新秩序建設」やそれを支えるイデオロギーとなる「新文化の創造」を演出させることである。これを受けて、戦地報道が依然として継続されていくなか、作家たちの行動パターンにある変化が生じた。それまでの日本→大陸の戦地→日本の単一ルートから、日本→大陸の占領地（戦地に限らない）→満洲→日本というトライアングル・ルートを取る作家が目立つように増えてきたことである。突発した日中戦争が両国関係の行方に衆目を集めた傍ら、しばらく置き去りにされた満洲の存在がここで再び脚光を浴びるようになったのである。筆者の調査によれば、1939 年の一年間に日満華にまつわる日本側文学界の動きは主に以下のものが拾い上げられる（／は同月中にあった別の出来事を示す）。

1 月、菊池寛、訪中（徐州・南京など）。

2 月、大陸開拓文芸懇話会が設立される。

4 月、大陸開拓文芸懇話のメンバーが満洲視察へ出発（朝鮮・満洲・華北をまわる。伊藤整・福田清人・田村泰次郎・近藤春雄・湯浅克衛・田郷虎雄ら、～6 月・7 月）。／『拓け満蒙』が『新満洲』に誌名変更。／山田清三郎、渡満（開拓団等訪問、一旦帰京し 12 月に再度渡満、満洲新聞社に勤務）。／島木健作、満洲訪問（朝鮮・満洲北部開拓地等、～7 月）。／阿部知二・今日出海・真船豊、満洲・中国訪問（北満・華北など、～5 月）。

5 月、高橋新吉、訪中（朝鮮・満洲・北京・山東・華中、～9 月）。／坪田讓治、訪中（華北・華中、～7 月）。／小田嶽夫、満洲・中国訪問（満洲・華北、～7 月）。



6月、白鳥省吾、中国・朝鮮訪問（『文藝春秋』特派員、～8月）。／張赫宙、満洲訪問（大陸開拓文芸懇話会派遣、～夏）。／岩本修蔵、渡満（黒龍江省大頼県庶務課長）。／斯波四郎、訪中（東京日日新聞社高田通信員として郷土部隊慰問隊、～8月）。

10月、小林秀雄、中国・朝鮮訪問（華北・満洲・朝鮮、途中まで林房雄と同道、～12月）。／尾崎士郎、訪中（華北・内蒙古）。／森田たま、訪中（中央公論社特派員、華中）。／春山行夫、華北・満洲訪問（日本雑誌記者満洲国調査隊、～11月）。／深田久弥、永井龍男ら、中国・満洲訪問（満洲・蒙古・華北、文芸春秋社用務、～12月）。

11月、小山いと子、満洲訪問（満洲国招聘、日本雑誌協会代表団一員）。

12月、大佛次郎・加藤武雄、訪中（北京）。

このなかで、やはり大陸開拓文芸懇話会の動きが目立つ。彼らの活動に伴い、この年に日本で出版されたおびただしい戦記物とは別に、和田伝『大日向村』（朝日新聞社）、菅野正男『土と戦ふ』（大陸建設社）、打木村治『光をつくる人々』（新潮社）など、いわゆる満洲開拓文学というジャンルも活況を見せている。また、開戦直後に多く見られた戦場や兵士をクローズアップした作品から、占領地の日常生活や現地民衆に目を向けたものも登場した。組織化された文学者たちは当初の画一的な戦地報道から、時局の変化に応じて、思想戦、宣伝戦の尖兵として、より多様な役割に転換していく様子がここに窺える。

上記の時系列をたどっていくと、この転換点と重なって見えるのは、まさしく1940年2月に東京で開かれた東亜操觚者懇談会である。国内の文学者、文化人を手なづけた体制側が、いよいよ満洲や大陸占領地の記者、文学者に触手を伸ばし、抱き込もうとする姿勢を見せはじめている。

さて、上述した日本側の一連の動きに対して、満洲国側のメディアや文学界はどう応じたのか。日中開戦直後から1940年の東亜操觚者懇談会開催までの動向を検証すると、意外にもほとんど空白に近い状況が見えてくる。もち

ろん、たとえば満洲帝国皇帝溥儀が日満の「共同防衛」、「一徳一心」を訴える「時局詔書」を発する(1937.9.18)など、政官が拳国体制で日本への協力を打ち出していたが、日本側に見られたマスメディアや文学者たちを動員して戦地に向かわせる「ペン部隊」や戦地報道がほとんど見られなかった<sup>[17]</sup>。また、満洲国は日中戦争に際して日本を軍需物資などの面で支える兵站基地としての役割をはたしたが、思想戦・宣伝戦においては日本に比べてだいぶ後れていた観がある。日本と同様、新聞紙面のトップを占めるのはほぼ毎日戦況報道であったが、満洲国の一般民衆にとって日中戦争は遠い場所で起きている出来事のように思えたのではなかろうか。

文学界に注目してみると、この間に文学活動そのものがむしろ停滞していたし、日中文学者の間はほとんど没交渉の状況であったと言っても過言ではない<sup>[18]</sup>。たとえば、満洲国内にほぼ唯一の全国的な文学者団体である満洲文話会は、日中戦争前夜の 1937 年 6 月 20 日に大連で誕生したが、満鉄や満洲国政府から資金援助を受けて活動していたにも関わらず、1939 年まで政府や軍に対する組織だった協力活動がそれほど目立たない。設立当初の趣旨である文学者同士の親睦交流が主な活動内容だったようだ。

一方で満系側に目を転じると、各地で小規模な同人誌や新聞文芸欄をベースにした活動がほそぼそと続けられていたが、文話会のような全国的な文学者団体は存在しなかった。また、1937 年あたりから日系文学者の間で起きた「満洲文化論議」「満洲文学のイデオロギー論争」において、満系文学者の存在がようやく日系文学者に意識されはじめたが、日満の文学者が一堂に会して活動するようになるのは 1940 年以後である。ただし、その接点となるような動きが 1939 年に入ってから出始めたと言ってよい。ひとつは、満洲文話会が本部を大連から新京へ移転し(同年 7 月)、体制側に接近していたことと、大型同人誌『藝文志』や『文選』が相次ぎ創刊され(前者 6 月、後者 12 月)、満系文学者の活動が活気を帯び始めるなかで、大内隆雄の翻訳により『満人作家小説集 原野』が東京で出版されたこと(三和書房、同年 9 月)が挙げら

れる。

上記の動きをきっかけに、日満双方の文学者がコンタクトを取りはじめ、次第に大規模な交流活動に発展していく様子とその後の動向に対する検証から浮かび上がってくる。以下いくつか具体的な事例を挙げておく。

1939年9月23日、大内隆雄訳『満人作家小説集 原野』の出版記念会が、新京文話会の九月例会として国都飯店で開かれる。原作者の古丁、小松、遅疑、陳松齡ら満系作家を囲み、日本人作家三十数名が出席した。

10月、同小説集の批評座談会が、新京文話会の十月例会として開かれる。古丁、小松、山田清三郎、長谷川濬、坂井艶司、逸見猶吉、今井一郎、阿南隆、今村榮治、大内隆雄が出席。

11月、『満洲文芸年鑑 第3輯 康德6年版（昭和14年版）』が満洲文話会より刊行される。

12月21日、日満文芸協議会の設立準備のため、近藤春雄（大陸開拓文芸懇話会）、甘利榮治（駐日満洲国大使館）が来満。満洲文話会と数回にわたり打合せ、26日に関東軍報道班長長谷川宇一、弘報処武藤富男らも出席する報告会で経過報告、28日に日本に帰国した。

同月、満洲文話会が、大内隆雄を東満・朝鮮に、北村謙次郎を熱河に、今村榮治・小松を東満地域に視察派遣。

同月、満洲文話会東京支部が設立される。岡二郎、宮川靖、上村哲弥、松原一枝、石森延男らが参加。

同月、満洲文話会北京支部が設立される。近藤綺十郎、石原巖徹、松本光庸、古川賢一郎、長谷川四郎、小池亮夫らが参加。

同月、満洲放送文芸協会が設立される。

以上の如く、1939年夏頃までの活動停滞、日満没交渉の状態がこの年の後半に入ると大きく変動しはじめた。特に、文話会による作家の現地視察派遣は明らかに日本側の戦地報道に相似しており、1940年以後はさらに盛んになっていく。また、文話会も政府への接近とともに、上記の如く内外に支部を

整え、満系会員を積極的に受け入れるなど、組織の拡大に奔走した。さらに 1940 年以後、文話会は満洲視察にやってくる日本内地や外地の関係者を受け入れる満洲国代表的な文化機関として急速に変貌を遂げていった。しかし、1941 年 4 月、より体制側に密着する満洲文藝家協会の発足に備え、文話会本部が解散に追い込まれ、また同年 8 月、文藝家協会の上部団体となる満洲藝文連盟の発足に伴い、文話会がついに吸収・解消された。以後、満洲国が先導する形で、1942 年 11 月に大東亜文学者会議が日本で開催された<sup>[19]</sup>。

このように整理して見えてきたのは、1940 年 2 月に東京で開催された東亜操觚者懇談会は、日本の文学者にとって戦地報道から「東亜新秩序建設」へ切り替える転換点となり、満洲国の文学者にとって体制側に取り入れられ、また日本の文学者と関わりはじめるきっかけとなったのである。その一例は冒頭で取りあげた、懇談会の開催にあわせて、満洲国政府より派遣された古丁、小松、山田清三郎ら作家訪日団のことである。彼らの行動についてはすでに別稿(前掲)で論じたので、詳細はそちらに譲ることとする。一方で、満洲国内の状況に目を転ざると、たとえば、『大同報』1940 年 2 月 11 日付けの「文藝」欄に「紀元兩千六百年隨感」として、執筆者・堅矢を皮切りに、以後数十名の作家が同一タイトルで文章を発表するなど、かなり組織的なプロパガンダ工作に関わるようになったことが確認できる。

#### 4. おわりに

東亜操觚者懇談会は会議の議題にあったように、その後も継続的に開催された。いま確認できたのは、1941 年 5 月、広州で開催された「東亜新聞記者大会」(第二回)、1942 年 8 月、満洲国代表が提案した、建国十周年にあわせて首都・新京で開催された第三回大会である<sup>[20]</sup>。ここで第三回会議の概要を簡単に整理して本論を閉じることとする。

第三回大会は日滿華の三カ国代表だけが参加し、観光や視察など豪華なエ

スカション付きの東京大会に比べ、四日間だけのかかなり簡素な会議だったようだ。参加代表は 102 名、来賓は 200 名あまりあったという。

汪精衛政権側（華中、華南）からは、团长・趙慕儒（中央電訊社副社長）以下、金雄白（上海平報社長）、董漪珊（華北庸報整理部長）、郭秀峯（国府宣伝部常務次長）ら約 20 名参加。華北からは、副团长・管翼賢（北京時報社長）以下、佐々木健児（中華通社社長）、陳重光（新民報編集長）、張子傑（華北新聞学校教授）、鄭籌康（青島大新民報編集長）ら 6 名参加。蒙疆側から愚勤布図各其・蒙古聯合自治政府広報局職員ら 4 名参加。日本からは、团长・布施勝治（東京日日新聞）をはじめ、塚本義隆（同盟通信社）、白川威海（朝日新聞社）、池田邦夫（日本新聞会）、石川皆男（雑誌社）、関茂（北海タイムズ審査部長）ら、約 30 名参加。さらに関東州から島屋進治（泰東日報）ら 4 名参加した。ホスト満洲国側は、大会委員長・武藤富男（弘報処長）、大会部長・莊開永（弘報処参事官）、松方義三郎（国通社理事長）以下、41 名が参加した。

主な日程は以下。

1942.8.3、正午、汪精衛政権代表団が、満華直通快速列車「大陸号」で新京到着。満洲国側は山海関まで出迎え使者を派遣し、奉天からは満日などの関係者が同乗した。駅では、莊・接待部長以下、満日、満新、康德、国通など各通信社、新聞社の代表、駐満大使館ら関係者百余名が出迎え。

1942.8.4、正午、華北代表一行 6 名が到着。

1942.8.5、朝 9 時、国都ホテルに各国代表団長が集合。午前は、新京神社、建国神廟参拝。皇帝宮殿奉拝。関東軍訪問。忠霊塔参拝。国務院訪問。建国忠霊廟参拝。協和会中央本部訪問と、めまぐるしい行事が続いた。一般団員たちは観光バスで市内観光。

正午、ヤマトホテルにて、武藤富男弘報処長主催の招待宴。

午後、病院に負傷兵士への慰問をもって、一日目の日程が終えた。

1942.8.6、朝 9 時、新京紀念公会堂で会議が開幕。以後、8 日まで続く。

ところで、本稿は日満支「三カ国」を考察対象としながら、汪精衛政権側の

動向や「日支親善」、「文化建設工作」に関わる事項に踏み込めなかった。また、満洲国の作家代表が多く参加していたが、この会議が彼らに及ぼした影響、会議を介して中華民国代表との接触や交流の有無、また、注目された女性記者の孫惠卿や女性作家の呉瑛の参加意義などの問題に考察が及ばなかった。今後の課題として引きつづき追求していきたい。

【お断り】文中の満洲、満洲国、日系、満系などの表記は歴史的用語として用いたもので、サブタイトルの「満洲国」以外は「」をつけないこととした。

#### 参考史料

- 東亞操觚者懇談會我國代表正式決定，大同報・文藝，19400202
- 東亞操觚者懇談會預定開會的日程，大同報，19400205
- 操觚業懇談會代表結團式，大同報，19400206
- 東遊記行 (1) 出席東亞操觚懇談會，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400206
- 出席操觚者懇談會我代表抵東京，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400211
- 東遊記行 (2) 出席東亞操觚懇談會，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400211
- 東亞操觚者懇談會 由今日起舉開，大同報，19400211
- 東遊記行 (3) 出席東亞操觚懇談會，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400213
- 行蹤留痕 (旅東手記之一)，惠清 (孫惠卿)，大同報・文藝，19400213
- 操觚者懇談會第二日午後動靜，大同報，19400214，2 版
- 操觚者講演會，大同報，19400215
- 東遊記行 (4) 東亞操觚懇談會，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400216
- 東遊記行 (5) 操觚者懇談會第二日，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400217
- 東遊記行 (6) 操觚者懇談會最終日，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400218
- 東遊記行 (7) 參觀東京市主要場所，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400219
- 操觚懇談會無事終了，大同報，19400219

- 雜誌協會召開座談會 暢談滿洲情況，大同報，19400219
- 各代表抵名古屋，大同報，19400219
- 東遊記行（8） 赴橫濱道上如入仙境 箱根美景更使人流連，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400220
- 操觚者各代表轉赴京都，大同報，19400220
- 東遊記行（9） 古城名古屋建築華麗，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400222
- 操觚代表抵大阪，大同報，19400222
- 華中操觚代表昨由長崎歸國，大同報，19400222
- 操觚者各代表由大阪赴神戶，大同報，19400222
- 行蹤留痕（旅東手記之二），惠清（孫惠卿），大同報・文藝，19400224
- 我操觚代表由神戶就歸途，大同報，19400224
- 東遊記行（10） 離別京都市到奈良，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400225
- 我操觚者代表抵下關，大同報，19400225
- 操觚我代表昨晨抵釜山，大同報，19400225
- 出席操觚者懇談會新京代表歸來，大同報，19400226
- 東遊記行（11） 到大阪觀光畢赴神戶，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400226
- 東遊記行（12） 觀光各處備受歡迎，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400227
- 東遊記行（13） 異國美麗的山和水，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400228
- 行蹤留痕（旅東手記之三），惠清（孫惠卿），大同報・文藝，19400227
- 東遊歸來感想，董步蟾，孫惠卿，大同報，19400301
- 滿日文化緊密握手 派遣滿系作家赴日，大同報，19400206，10版
- 紀元2600年隨感，吳瑛，大同報・文藝，19400317
- 東遊後記（一），吳瑛，大同報・文藝，19400321
- 東遊後記（二），吳瑛，大同報・文藝，19400326
- 東遊後記（三），吳瑛，大同報・文藝，19400328
- 東遊後記（四），吳瑛，大同報・文藝，19400330
- 紀元兩千六百年隨感，堅矢，大同報・文藝，19400211

關於東亞操觚者大會，之白，大同報・藝文，19420806

紀元二千六百年紀念東亞操觚者懇談會經過實録、疑遲、藝文志、3，19400615

大東亞操觚者大會記，記者，麒麟，2-9，19420901

古丁、外文、疑遲 歡送会，滿洲文話会通信，30-12 面，19400215

操觚者大会に文話会員出席，滿洲文話会通信，30-12 面，19400215

東亞操觚者大会參加雜記，遲疑・大内隆雄譯，滿洲文話会通信，19400415

東亞操觚者大会參加雜記，遲疑，滿洲文話会通信，32-12 面，19400415

訪日感想座談会，滿洲文話会通信 32-13 面，19400415

文化懇談会 留京日・滿・鮮作家，滿洲文話会通信，32-14 面，19400415

東亞操觚者代表一行 樞原神宮參拜後賑かに來阪，朝日新聞・大阪，19400221

歸還報告会 東亞操觚者懇談会，朝日新聞・大阪・滿洲版，19400307

東亞操觚者大会開幕，滿洲評論，23-7，19420815

## 注釈

- [1] この時期日中間の動向に関する記述は、主に山本武利編『「帝国」日本の学知 4 メディアのなかの「帝国」』（岩波書店、2006.3）、任思ほか著、蔡登山編『汪精衛集団』（独立作家・台北、2014.5）を参考した。
- [2] 觚（こ）とは、古代中国では文字を書く木簡のこと。操觚はすなわち木簡を手に取り、その上に文字を書き記すこと。のちに筆を操って詩文を作る、文筆に従事することの意に転じた。近代日本では著述業、編集者、新聞・雑誌の記者などを操觚家、操觚者と呼んでいた。
- [3] 日本側にはなく、中国側にはわずかに以下二篇しか見あたらない。王明亮，赵爽：东亚操觚者大会到底举办了几届？——对一段史学界定论的重写，《国际新闻界》2012.04。李冉： 吴瑛与第一次“东亚操觚者大会”——以《东游后记》为中心，《新文学史料》2017 第 3 期。
- [4] 拙論「紀元 2600 年の日滿文学交流——滿洲国作家古丁訪日の足跡を追う」『人文学報』（東京都立大学人文社会学部中国文化論教室）第 517



- 号、2021.3.19、pp.111-127。懇談会資料は、『紀元二千六百年記念 東亜操觚者懇談会誌』東京市役所、1940.3.31。
- [5] 趙夢園（小松）「東遊印象記」『明明』2巻3期、1937.12。
- [6] 東京市は「新東亜建設大会」記念活動として、ほかに東亜青年交流会、東亜教育者懇談会、東亜建設大会もこの年に開催した。
- [7] 「東亜新秩序建設の声明」『近衛首相演述集（その二）』アジア歴史資料センター、レファレンスコード：B02030031600。
- [8] 池田浩士編『大東亜共栄圏の文化建設』人文書院、2007.2。12頁。
- [9] 以下参照。「東亜操觚者懇談會我國代表正式決定」『大同報』1940.2.2、10面。『紀元二千六百年記念 東亜操觚者懇談会誌』（前出）。なお、「日本皇紀二千六百年満洲帝国慶祝委員会」とは、祝賀諸事業を管掌するために、1939年12月1日、満洲国政府、協和会、満鉄などの特殊会社、民間一般から委員を選出し結成された公的団体。委員長は張景恵國務総理、事務局は協和会中央本部に置かれた。
- [10] 惠清（孫惠卿）「行蹤留痕（旅東手記之一）」『大同報』・文藝、1940.2.13。
- [11] 古野伊之助は「通信業界を一国一社にした張本人」「軍と提携してメディア全体のファシズム的統一を推進した立役者」と言われている（山本武利編『「帝国」日本の学知4 メディアのなかの「帝国」』、p.21）。
- [12] 董歩蟾は前年夏に起きたノモンハン事件について大同報記者として戦地取材し、『諾門汗從軍行』（大同報社、1940.2）を刊行した。
- [13] 董歩蟾、孫惠卿「東遊記行（4）東亜操觚懇談會」『大同報』1940.2.16。
- [14] 日中戦争に関する日本側マスメディアの報道及び文学との関わりについて以下の文献を主に参考した。松本和也『日中戦争開戦後の文学場 報告/芸術/戦場』（神奈川大学出版会、2018.3）。五味淵典嗣『プロパガンダの文学：日中戦争下の表現者たち』（共和国、2018.5）。
- [15] 松本和也前掲書 p.99。
- [16] 五味淵典嗣前掲書 p.100。
- [17] 日中戦争に関連する戦地報道が満洲国のマスメディアにまったく登場しなかったわけではない。たとえば、裕振民「華北戦雲視察記」（『大

同報』1937.7.23-8.26、十回連載) などが確認されている。ただ、「本社特派員」という肩書きが示すように、これは新聞社独自の派遣によるものと推察される。

- [18] ここの「日中文学者」とは、満洲国内の日系文学者と満系文学者、それから日本内地の文学者と満洲国内の満系文学者の二重関係を指す。
- [19] 会議の開催経緯について以下の拙論がある。大久保明男「大東亜文学者大会と「満洲国」の「文学報国」——第一回大会と「満洲国」の動静」『人文学報』(首都大学東京人文科学研究科) 第 448 号、2011.3.31、pp.105-125。
- [20] 1943 年の東京で第四回大会が開催された記述があるが(前掲、「王明亮, 赵爽」論文)、確証が取れていない。

